

著：ジャン E プレゲンズ 執筆協力：岩永 敏彦

トップジャーナルに学ぶ

センスのいい科学英語論文の書き方

書評者：倉本 秋(高知医療再生機構理事長)

本書の著者であるジャンさんとの出会いは、1980年代後半までさかのぼる。当時私が勤務していた東大病院分院の助教授から、ジャンさんを紹介された。知り合ってから10年間は、2週間に1回程度おしゃべりの機会を持ち、論文ができたなら校閲してもらっていた。その後、私の職場は高知大、そして高知医療再生機構へと変わったが、投稿論文は全てジャンさんの手を経ており、今では機構が販売する学内委員会 Web 審査システムの英文マニュアルまで校正をお願いしている。

今回、『トップジャーナルに学ぶ センスのいい科学英語論文の書き方』を読み進めながら、30年以上前にレトロな東大分院の建物で教えてもらっていたことは、ステップ I の「英語のマインドをつくる」に述べられている内容であったと気付いた。確かに、科学論文を書こうとする日本人は皆、英作文はできる。しかし残念なことに、「(日本の)学校英文法」とは似て非なる、「英文」を構成する法則、コンセプトの理解は欠落している。native speaker(以下、native)が学ぶような paragraph writing の概念を教える授業は、

日本にはないからである。そこをすっ飛ばして中学から大学まで英語を学んだ若い研究者たちは、卒前、あるいは卒後しばらくして初めての論文を完成させる。「事実は現在形で」とか、「受動態は少なめがよい」とかいう先輩の指示だけを道標に、“paragraph”を日本語の「段落」に置き換えただけの頭では、「ミニエッセイ風」などの構成は思いも至らない。このような前提を知らないと、native の proofread を受け取ったとき、その朱字を許容し難い場合がある。native も、日本人の文の順序や改行を怪訝に思いながら、校正と格闘する羽目になる。

推奨したいのは本書の3つの使い方である。まず、将来科学論文を書く可能性のある人は、卒業した時点で本書を読んでおいてほしい。そしてステップ I の英語のマインドだけはきちんと理解しておくことを勧めたい。以後、英語論文を読みながら、耳障りでない英語を嗅ぎ分け、自分の糧にするために有用である。次に論文を書くときには、Materials and Methods などのセクションごとにステップ II の該当する項目を一読してから、英語類語辞典を手許に置

いて書く作業を積み上げていくとよい。最後に、論文を書く前はいつでも signal words の分類とステップ III を読み返す習慣をつけると、自身の論文の質を高めることと後輩の指導に生かせそうである。こうすれば、編集者から“*There is a language barrier.*”と言われぬ、研究に対する正当な評価が待っている。

英文学術誌の編集者であり、本書の執筆に協力された岩永敏彦先生のコラムも参考にしてほしい。もちろん native の英文校正が必須であることは変わらない。投稿誌の論文の傾向をつかむ、その雑誌に必要な字句の定義を考える、大文字ルールを知るなどの教えも、示唆に富んでいる。参考文献の年号巻頁の記載順だけをチェックして論文を書き始めた私の若かりし頃にも、この本があればと悔しくなる。本書の価値は AAA である。

● A5・頁 160 2022 年 1 月
定価：3,740 円
(本体 3,400 円+税 10%)
[ISBN978-4-260-04625-1]
医学書院刊